



IMMORTAL MAN

人々が言う、私は「イモータルマン」だと。

ある国の言葉で不老不死の男。

ああ何百回目かの冬が来る。

これで最後だと言い続けて、疲れて自分の心臓にナイフを突き立てた。

無駄なことだと気づき、旅をすることにしている。

世界は回り、戦争がおこり、国はいくつも別れて合併を繰り返す。

「イモータルマン」になる条件は意外に簡単だった。

今はもう存在しないけれど、昔は存在していた、人魚。

その心臓を食べるだけ。

戯れに食べた心臓は生臭い、としか覚えていない。

いつだったかな、「イモータルマン」になったのは。

記憶の彼方、思いだそうとしても無理というもの。

生まれたのもいつだったかな。

そういえば、ある青年がいた。人魚の心臓を探して人魚に食われた。

青年よ、死の無い生活は案外疲れるぞ。

木枯らしが吹く、人々の衣装も変わり、賑わうのは城下町。

このローブも、さすがに三十年使ってはぼろぼろだ。

当時新品の毛織物も三十年でぼろ布に変わった。

そろそろ、新しいローブと手袋がほしい。

この国に来たのは百回、周っていない国などないが、ここが一番豊かで盛んに商店が出ている。

気に入った、これを買おう。

ああ何百回目かの冬が来る。

世界が変わって人が何千何万何億死んでも私は変わらない。

病に侵された国王に呼ばれた。

お前は「イモータルマン」かと。

「条件は何か」と震える手で聞いてくる。

死を恐れる哀れな老人を私はみつめた。

「人魚の心臓を食べるべし」と告げれば、たちまち老人は激怒。

「童話の話をしろとはいっておらん！」

城を追い出された。

童話の時代から生きているのか。

「イモータルマン」も中々疲れる。

ああ何百回目かの冬が来る。

新調したローブもいつかやぶれるけれど、手袋は今は暖かい。

ああ何百回目かの冬が来る。

あとがき

テキスポの方で800字バトルがあり、ついでにラーメン屋行って待っていた時になんとか書いた奴、を、そのままパソコンの方に送りました。

このとき200文字。

何で相当年数の経ったIMMORTALの世界軸なのかは、何か理由があった気がします。

なんだっけ？な、なんだっけ？

あ、ルナドンやってて、イモータルの神様に器用の塔に行けとか言われて、「仲間が五人いて、さらに家に限界まで子供居るんだが？」と、無視しては子づくりして、そのたびに一年経過して「おぬしには無理だったようじゃのう」と言われたので、イモータルに襲いかかって殺したんだっ(カードになる)。

でもイモータルという名前だけあって、すぐに九十歳前後の年齢で復活する。

IMMORTALをかいていた時のイメージミュージックが、志方あきこさんのNOTTE、今回は、平沢進のQUIT。

今思い出しましたが、そういや平沢でIMMORTAL MANという英語名(死のない男)の曲がありましたな。

IMOORTAL MANにした理由は、世界軸が何気にIMMORTALと同じだから。

今回の話の最初の方に「人魚を探していた青年」というのが、IMMORTALの彼です。

彼は手に入れられなかったが、この男は図らずも手に入れてしまった。

死すら凌駕してなにに近付いたのか、生き続けていくなかで人たちが死んでいき、世界が変わり、王様に懇願されても何も変わらない。

国も変わって技術も進歩したが、私は変わらない。

という意味での男の独白でした。

青年よ、死のない生活は疲れるぞ。

とってはいても、この男は精神的にタフなのと、自殺図っても死ねないので、諦めちゃった。

そのままずっと生き続けてしまって、生きた伝説になっちゃったよー。トホホー。

...という。

特に中身考えず書いていたので、何をかこうにも何とも何とも。

今回の縛りは、企画専用として、800文字、「商店街」「手袋」「これで最後」。

商店は入れられても商店街は無理でした。

特に入れなくてもいいという企画内容だったので、これで。

[IMMORTAL](#)は十六歳の時に書いた奴。